

フランチェスカ・ブレイ著／古川久雄訳

『中国農業史』*

渡 部 武**

本書は中国科学技術史研究に前人未到の新領域を拓いた、英国のジョセフ・ニーダム氏(1990-1995)の『中国の科学と文明』(原題: Science and Civilisation in China)中の一分冊を成す。当初、彼は単独で全巻を執筆する予定であったが、執筆中に著作計画がしだいに膨らみ、独力による完成が無理と考え、後半の各分冊執筆を第一線で活躍する専門の研究者に委嘱した。そして第6巻生物学と生物学的技術の第2分冊農業(Vol.6, Biology and Biological Technology, Part II, Agriculture, Cambridge University Press, 1984.)を担当したのは、若手研究者のフランチェスカ・ブレイ(Francesca Bray)女史であった。

『中国の科学と文明』の邦訳に関しては、東畑精一・藪内清両氏による監修で、前半の4巻全6分冊(序論, 思想史, 数学・天の科学・地の科学, 物理学, 土木工学, 航海技術。邦訳では第I期全11巻)が、1974~80年にかけて思索社

から刊行された。この邦訳作業には私はいささか関与したことがある。当時、私はオーバー・ドクター生活をしていて、ある先生の紹介でこの邦訳の索引部分の作成を全巻担当することになった。これは単純な索引作りではなく、翻訳者によって様々に訳出される中国の専門語彙を、中国史や中国思想史の文脈で馴染み深いものに戻すといった煩瑣な作業を伴い、まことに骨の折れる仕事であった。幸いなことに、邦訳の編集を担当したのは、京都大学大学院で動物学や森林昆虫学を修めた垂水雄一・藤本時男両氏であったので、お互いに知恵を出し合って、この難関をどうやら克服することができた。このとき垂水・藤本両氏が異口同音に述べていたのは、『中国の科学と文明』中で本当に興味深い巻は、後続の第5巻化学と化学技術と第6巻生物学と生物学的技術であるが、思索社でこれらの巻を含めた第II期の邦訳出版の実現は、きわめ

* 2008年7月30日受理

** 東海大学教授

て困難であろうとのことであった。その理由は、邦訳出版に莫大な経費を必要とすること(側聞によると、当時思索社は豪華本企画で得た収益を本書の翻訳出版に投入していた)、また藪内清先生が認めるところの有能な科技史研究者の大半が第Ⅰ期の翻訳に投入され、第Ⅱ期のための翻訳要員は払底し、しかも高齢の藪内先生に代わられる監修者を望むことは無理であったからである。

第Ⅱ期の翻訳実現が絶望視されたころ、私は京都大学東南アジア研究センター教授(当時)の古川久雄氏から、ときおりブレイ氏の農業分冊の価値について尋ねられたことがあった。私は「中国農業史研究において類書がなく、西欧における一つの重要な成果でしょう」と返答した覚えがある。以来、古川氏より時おり中国農業史に関する漢籍や関係資料についての質問が寄せられた。そして彼は精力的かつ忍耐強く本書の翻訳を進め、ようやくここに大著分冊の全訳が完成したのである。

本書の章立ては以下のとおりである。

第1章 序論—中国農業の起源と特徴—

- 1 中国農業全般的特長／2 農業地域区分／3 中国農業の起源

第2章 文献資料

- 1 『月令』、すなわち農業暦／2 農書／3 官撰編纂書／4 専門書／5 補足資料／6 中国資料の性格と歴史解釈の際の問題／7 ヨーロッパの伝統との比較

第3章 農地体系

- 1 開墾と開拓／2 移動焼畑耕作／3

永年耕地

第4章 耕作体系—農具と農法

- 1 耕耘具／2 播種／3 施肥／4 除草と中耕／5 収穫、脱穀、風選／6 穀物貯蔵

第5章 作物体系

- 1 作物輪作／2 ミレット、ソルガム、トウモロコシ／3 小麦と大麦／4 稲／5 豆類／6 油糧作物／7 根菜作物／8 繊維作物／9 蔬菜と果実

第6章 結論 農業の変化と社会—停滞か革命か？

- 1 中国はヨーロッパの農業革命に寄与したか？／2 中国の農業革命はあったのか？／3 発展か変化か？

上記の目次からも分かるように、本書は農業技術の発展向上、新作物の導入および歴代王朝の農業政策などによって、中国の経済構造が時代を追ってどのように変化していったかを述べたものではない。ブレイ氏の執筆の主眼は、農地システム、農具・農法、栽培作物、つまり第3章から第5章にあり、中国農業史を主として技術的側面から詳述している。このような執筆方針は、たぶん日本の中国史研究者にとって物足りないことであろう。戦後、わが国の中国史研究において社会経済史学が台頭し、時代および地域別にきわめて精緻な研究成果が続々と公表されてきた。それは一生を費やしても読みきれないほどの漢籍史料の存在がそのことを可能としてきたわけであるが、それは半面において研究者間に一種の縄張り意識を抱かせ、各種の研究を統合して概観してみようとする試みを遅延させる

弊害をもたらした。

ブレイ氏は中国文献史学研究における蓄積を十分承知しており、その路線に沿って作業を進めることは「ヘラクレス的な力量が必要である。本書は農業体系と自然環境の関係を述べることに限定し、社会と経済とについてはわずかに触れるにとどめた」(序文 xv 頁)と述べている。その結果、中国の農業体系と自然環境との関係を、ヨーロッパや西アジア、あるいは彼女が文化人類学調査のフィールドとしてきた東南アジアのそれと比較するという方法で、その特色をあぶり出すを試みている。実は、このような方法論こそニーダム氏自身が『中国の科学と文明』を執筆していく中で創案したものなのである。周知のように、彼は中国科技史を研究していく過程でひとつの重大な問題に逢着した。それは明代の鄭和が活躍する15世紀前半頃までは、中国のほうが西欧よりもはるかに科学技術文明が進歩し、以後になるとその形勢が逆転していくのは何故かという問題である。いわゆる「ニーダムの難問 (Needham's puzzle)」と言われる問題提起である。そして彼は驚嘆すべき執念をもって関係資料の収集に努め、中国と中国以外の個々の科学技術の貸借表を作成し、両地域相互間の伝播や影響を解明するため、化学的分析で用いられている容量分析 (ニーダムは titration という用語を使用) の方法に倣って、相互の具体的事実関係を闡明した。

ブレイ氏も本書の624頁以下において、中国農業史上の大きな問題提起を行なっている。それは明末に来訪したイエズス会士の中国農業事情報告を踏まえた上での発言で、次のような内容である。中国農業は高い生産性、独

自の作物輪作、精巧な揚水施設および中国農民の合理性を具備しながら、何ゆえに農業革命が起こらなかったのか。18世紀の北ヨーロッパでは、新しい農機具(とくに曲面発土板を具えた中国犁の導入)、改良輪作、新品種の作物導入および農場管理の再編によって著しく農業生産を向上させ、農業革命を起こしたと考えられている。北ヨーロッパにおける中国農業技術の導入が急速な経済的变化をもたらしたとしたならば、その技術の老家本元である中国において農業革命が起こらなかった理由を知りたくなるのは当然であろう。この問題を取り扱おうとすると、かならず陥る先が「中国社会停滞論」である。この議論はそれなりに意義を有しているが、明快な結論を得ることはきわめて困難である。ブレイ氏は人口圧と生産拡大の限界に原因を求め、あまり立ち入った説明はせずに、その問題となる議論を第7巻の社会的背景に譲っている。

ところで、本書の原著が著されたのは1984年で、刊行後すでに二十数年の歳月が経過している。中国における農業の起源の部分については、近年の中国考古学上の新発見によって書き改めるべき点がいくつかある。それにもかかわらず内容の大半にいささかの古さを感じさせないのは、世界農業史における中国農業史の位置づけがしっかりと定められていることと、中国の農業史文献(とくに農書)、農村調査報告、研究論文のみならず、非中国地域の農業史文献の悉皆的調査、さらには各種の疑問点をその方面の専門家に問い合わせる努力(脚注に専門家たちからの私信の注記が多く見られる)を怠りなく積み重ねてきたからである。しかし、ブレイ氏が本書を執筆して

いた1980年代初頭は、中国内にはまだ未開放区が多くあり、外国人による農村調査はほとんど許可されていなかった。中国農業史研究に不朽の業績を残した天野元之助氏(1901-1980)は、戦前に満鉄調査部の調査員として満洲・華北・華中・嶺南(海南島)などを広く調査した経験を有している。私自身も1980年代末から十数年にわたって西南中国諸民族の農具調査に従事した経験があるが、このような現地地で得た具体的な調査成果は農業史研究の上で計り知れない価値を有する。ブレイ氏が本書の執筆に着手したのは、中国でのフィールドワーク実施に著しい制限が加えられていた時期に当たっていたので、中国の稲作については東南アジアでの実地調査の成果を援用せざるを得なかった。そこで彼女が執筆時にバイブルのように参照することになったのは、前述の天野氏の『中国農業史研究』(初版1962年、増補版1979年、御茶の水書房)であった。それもすべて英訳した草稿を準備し、随時参照していたそうである。天野氏は中国内に豊富な友人研究者の人脈を有していたので、自己の著作中に彼らによって提供された多くの情報を入れ子のように挿入している。このような文章スタイルは旧時代の中国知識人の「札記」を思わせ、それは専門家にとっても決して読みやすい文章ではなく、ブレイ氏もその読解に苦勞されたはずである。

また中国の農業地域区分に関して、ブレイ氏は解放前に南京金陵大学教授ロッシング・バック(Lossing Buck, 1890-1975、小説家パール・バックの夫君)によって著された農村調査報告書『中国の土地利用』(Land Utilization in China, 1937)に依拠して、9区域区分方式を

採用し、とくに華北の畑作と華中・華南の稲作を区分する秦嶺—淮河線に着目している。このバックの中国農業地域区分は現在に至るまで重要視されており、香港中文大学の陳正祥氏の『中国農業区域』(1970年)は基本的にバックの説を踏襲し、10区域区分説を提示している。この秦嶺—淮河線以北の畑作地帯で、中国の乾地農法(dry farming、中国語では保墒農法と称する)が完成される。その詳細なメカニズムについては、6世紀前半の高陽郡太守賈思勰によって著された『齊民要術』に具体的に記されており、ブレイ氏はその起源を漢代にまで遡ることができるとしている。私も彼女の意見を妥当と考えている。また漢代の文献にしばしば登場してくる江南地方の「火耕水耨」による稲作について、彼女は後世の注釈者の説に惑わされることなく、焼畑の要素を否定して永年耕地での水稲栽培と断定したのも、おおむね正しいであろう。

つぎにブレイ氏が最も力を注いだ第3章から第5章についてであるが、彼女はたぶん元朝時代の王禎の『農書』をモデルにして、これらの章を執筆したと考えられる。この『農書』は「農桑通訣」、「百穀譜」、「農器図譜」の三部分より構成されており、それらの内容が見事に彼女の著作の三章分に対応しているからである。また王禎は華北の山東地方に生まれ、華中の安徽および江西で地方官を歴任した経歴があり、そのため畑作地帯と水稲作地帯の農具や農法に精通するようになった。したがって「農器図譜」には、中国南北地方の農器具が細大漏らさず挿絵入りで解説されており(たぶん農具製作上の仕様書をも兼ねていた)、その大半がつい近年まで農村で見かけ

られるものであった。

ブレイ氏の初期の問題関心は大型耕起農具の犁にあった。犁の研究ではドイツのレーザー（Paul Leser）という大先達があり、ブレイ氏は彼の研究を補足するような仕事、たとえば漢代犁に装着された土壤反転板の研究なども行なっている。また華北の乾地農法における整地農具体系、すなわち犁で耕起し、平型ハロー（蹀肥）で土塊を粉碎し、枝条ハロー（縴）、もしくはローラー（陸軸）で土壤を鎮圧するという一連の農具体系が、魏晋南北朝の動乱期に、江南あるいは嶺南の水田稲作地帯に技術移転したことを示唆している。この技術移転の過程で縦型ハロー（紗肥、日本では馬鍬と称する）が登場するのであるが、ブレイ氏は東南アジアからの導入説を主張している。もしブレイ氏が長江以南の水田地帯における調査経験を有し、日本の古墳時代以降の木製農具に精通していたならば、おそらく中国での紗肥考案説を支持したことであろう。

ともかくもこれだけの名著を読み通すことは一気にできるものではない。読み進んでいくうちに、中国以外の地域の農業について多く学ぶことができた。それはブレイ氏が中国農業史を語るときに、つねに非中国の豊富な関係資料に照応させ、私たちにとっては思いもよらない観点から新事実を教えてくれるか

らである。中国では龍の模様をきざむように文章を工夫することを「雕龍」と称し、一説には無駄な苦勞をすることの意味もある。しかし、本書は実質を伴った雕龍の作である。

最後に古川氏の翻訳について少し触れておこう。古川訳は思索社版訳に倣って、本文中に引用された漢籍史料記事（原著は英文訳を掲載するのみ）はすべて原典に当って、その原文を掲載した。これは日本の読者にとって大変ありがたいのであるが、原典記事を探し出さなければならない訳者にとっては一大労苦である。そのため初校時に私とその作業の一部を支援し、また本文全文に目を通すこととなった。本書は出版助成金の交付を受けていたので、締め切り期限に追われながらの作業であった。時には古川氏は出張先のインドネシアから電話で質問してくることがあり、無事に出版された今となっては、これも懐かしい思い出となった。倉卒の間に校正を行なったため、専門用語の訳語については思索社版と同様に今回も問題点を残すことになった。これは翻訳作業に付いて回る問題なのかもしれない。なお本書の末尾に、農学者としての立場から古川氏による詳細な解説が付されている。あわせて参照していただきたい。

※フランチェスカ・ブレイ著／古川久雄訳『中国農業史』、京都大学学術出版会、2007年2月、A5判、xxx+850頁、定価9000円+税、ISBN 978-4-87698-690-3